

保育中における子どもへの援助改善の試みが 子どもと保育者に与える影響

Effectiveness of Children and Childcare professional on Support Modification
Intervention among Childcare Professionals

齋藤 めぐみ

Megumi SAITO

キーワード：保育者 援助 言葉がけ 行動変容

1. 緒言

幼児教育は、環境を通して行うものである（文部科学省 2017）。環境とは物理的、空間的、および人的環境である。特に人的環境である保育者の役割は大きい。そのため、保育者は常に切磋琢磨して質的向上に努める必要がある。

保育の質を向上させるための試みについては、これまで多く研究されてきた。特に第三者が保育者を観察することによる子どもへの言葉がけについての研究が多い。

例えば、阿部（2006）は、主体性の育みに影響を与える言葉がけのあり方について、保育者を観察しながら考察した。タイミングを外さずにその場その場に応じた言葉がけを行えるためには保育者の普段からの観察力、洞察力、見通しが重要であり個々に応じた幼児理解が大切である、と述べている。

三好（2016）は、保育者の意識変容と保育内容の改善を目指し「参与観察法」を用いた研修を行った。研修は「子どもの主体性を大切にすること」「一人一人の子どもの発達把握及び内面理解に努めること」「異年齢児保育の意義を理解し、積極的に取り組む」を目標に半年に一度行い、そのことが保育者の意欲を高める良い循環につながっていったと示している。

大久保ら（2007）は、ビデオ撮影や自然観察から、保育者の言葉がけが幼児の気持ちや表情、行動などに影響を与えている場面が多く見受けられ、このことから子どもの心身の発育・発達において保育者の言葉がけがとても重要な役割を担っていると考えられることを示唆している。言葉の内容だけでなく、声の大きさやトーン、表情や視線の高さなどを変えることが保育者の言葉が幼児の心に伝わる大きな要素なのではないかと示している。

須永（2017）は、保育者へのインタビューと観察により、共感的かわり、身体的同調が子どもの意欲を支える、遊びを意味づける、楽しさをさらに増幅したりすることにつながることを導き出した。これらが遊びの中で子どもの主体性を支えるために重要な役割を果たしていることから、主体性の保障には保育者の援助のありようが重要になると示唆している。

その他、環境設定についての研究として、工藤（2016）は、保育実践の事例から、幼児が興味・関心に基づく遊びに自発的に取り組み没頭するためにはモノや人と十分にかかわることのできる時間や空間の保障、一つ一つの遊びが関連づくような配慮、一人の遊びが周囲の幼児にひろがるような保育者の援助が必要であることを示し遊びの充実のためには保育者の援助が大変重要であると述べている。

いづれにしても保育者の援助が子どもの主体性に影響をすることは明白である。そして、そのためには保育者がどのような援助をしたらよいかを常に考え、それらの質の向上を目指した研鑽方法を多面的な方法を用いて検討する必要がある。

以上のように他者の観察による研究は多いが、自分自身で保育を振り返って改善方法を検討し考察している研究は少ない。自分の援助がどのようなものかを常に振り返り、不適切な援助については修正していく方法を検討する必要がある。

人の行動を修正していく行動変容は、セルフモニタリング(記録)、小さく具体的な目標設定など行動変容の理論を基本にした方法が効果的である(竹中、2008)。保育者の援助について様々な研究があるが、行動変容の理論を基本として保育者が自分自身で保育を振り返り目標を設定し記録をとりつつ援助方法の修正を試みる研究は著者の知る限りみあたらない。

以上より、本研究は保育者を対象として、保育中の子どもに対する援助を見直し改善を試みる行動変容の理論に基づいた介入を行い、保育者と子どもに与える影響について質的データを基にして探索的に分析し、検討することを目的とする。

具体的には、介入中の目標行動の内容、介入後の気づきとして自由記述方式で記載された内容全てを書き出した後、萱間(2007)を参考にしてデータをコード化して同類項をまとめて検討する。

II.方法

1. 調査対象

千葉県の短期大学において、著者が担当する現役の保育者を対象とした特別講習の受講生29名のうち研究に同意した26名を対象とした。

2. 介入期間

介入期間は、2018年11月26日から12月8日までの2週間とした。

3. 研究概要

千葉県の短期大学において、著者が担当した保育者を対象とした特別講習の受講生28名に対して質問紙と介入による研究を行った。介入は、まず自身が行っている保育中の子どもへの援助において改善したいことを抽出する。次に、それらに対する改善方法を考え、改善内容を意識して2週間保育を行うこととした。2週間の期間中「保育改善2週間チャレンジ」として、セルフモニタリングシートに毎日保育を振り返り、できたかできなかったか?を4段階(◎・○・△・×)で自己評価することとした。2週間後には、改善内容を意識して2週間保育ができたか、できなかったか、またそれらの要因、できた場合は、それに伴う子どもの変化、自身の変化の気づきを振り返った。

なお、介入前には、環境を通して行う幼児教育における保育者の人的環境としての重要性についての講義を行った。その際、子どもを受容すること、一人ひとりの特性に応じること、自発的、主体的な遊びを通して非認知能力を育むこと、保育者は計画的に環境を構成することなどを強調した。

4. 倫理的配慮

調査にあたり、調査項目、実施の有無は成績と一切関係しないことを説明した。また研究目的以外には使用しないことを質問紙に示すとともに質問紙配布時にも説明を行い、書面で同意の得られた者を対象とした。

5. 調査内容

1) フェイスシート

性別、年齢、保育経験年数について尋ねた。

2) 事前調査

保育中における子どもへの援助改善の試みが子どもと保育者に与える影響

現在勤務している保育施設における子どもへの援助の中で、“改善したい”、と思ったこととその理由について自由記述式で記入することとした。

3) 介入「2週間の保育改善チャレンジ」

“改善したい援助”について“具体的にどのように変えるか？”を目標行動として「保育改善2週間チャレンジ」(セルフモニタリングシート)に記入した。目標行動は、1つ～3つとした。毎日目標行動を意識した保育を行うこととして、1日の終わりには目標行動を行えたかどうかを◎～×で記入した。

4) 事後調査

①終了後に、◎を100%、○を80%、△を50%、×を%として目標行動の実行率を算

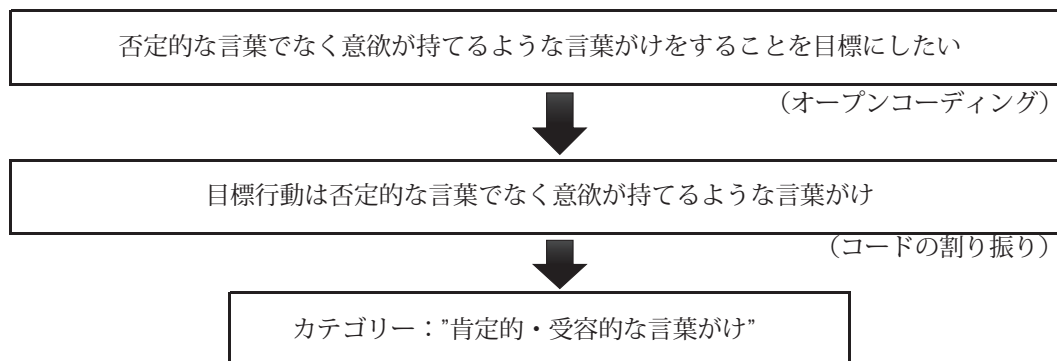
出した。

②目標行動の達成率が50%以上であった場合は成功要因、50%未満であった場合は失敗要因を含めて自由記述で考察した。また、2週間チャレンジ後の自身の変化、子どもの変化を自由記述で記入した。「保育改善2週間チャレンジ」のセルフモニタリングシート兼事後調査用紙を参考資料として最終頁に示す。

6. 分析方法

設定した目標、それに伴う保育者の変化、子どもの変化について、質的分析として萱間(2007)を参考にして全データをコード化して、同類項をカテゴリーとしてまとめた。コード化の流れについては、図1に示す。

図1 コード化の流れ



また、目標行動を実行できた成功要因について分析するために、KH Corderを用いて計量テキスト分析の「共起ネットワーク」の前処理を利用し頻出語の出現回数を用いた。共起ネットワークについては全て、樋口(2014)を参考に記述した。「共起ネットワーク」分析の前処理の手順は以下のとおりである。

語の抽出と頻出語

前処理の実行として、強制的に1語として抽

出すべき語を確認し、強制抽出する。強制抽出しないと例えば“気付く”が“気”と“付く”がそれぞれ1語として抽出される。その後、単語頻度分析で出現回数を分析する。

Ⅲ. 結果

1. 対象者の属性

対象者は26名、女性96%であった。

2. 全目標行動

対象者が設定した目標行動は全部で67行動、目標を1つ設定した者は1名、2つは9名、3つ設定した者は15名であった。全体で67の目標行動が設定されたが、保育中の子どもへの援助ではないものを除外し、分析対象は54の目標行動に対して行った。目標行動をコード化したところ、言葉がけ、環境設定、態度・行動に分けられた。そのうち、言葉がけに関する目標が30、態度・行動が19、環

境設定が5、と言葉がけに関する目標が一番多かった。言葉がけについて、カテゴリ化したところ、丁寧な言葉の使用、肯定的・受容的な言葉がけ、具体的な言葉がけ、考える機会を与える、次につながる言葉がけ、禁止の言葉を遣わない、の6つに分けられた。特に肯定的・受容的な言葉がけをする、が10行動あり一番多かった。また、態度・行動では、待つ、に分類される目標行動が11あった。カテゴリ化された目標行動を表1-1、1-2に示す。

目標行動	カテゴリ	サブカテゴリ
丁寧な言葉を使う(2)		
言葉遣いに気を付ける	言葉がけ	丁寧
言葉を選んだ言葉がけをする		
一人一人に丁寧な言葉がけを心がける		
褒める言葉がけをする		
感謝を伝える	言葉がけ	肯定・受容的
前向きな言葉がけをする		
ポジティブな言葉がけをする		
否定的な言葉でなく意欲が持てるような言葉がけをする		
プラス一言加えて褒める		
肯定的な言葉がけをする		
共感する言葉がけをする		
できたところを見つけ伸ばす言葉がけをする		
本人の努力、上達を励ます言葉がけをする		
具体的に褒める(3)		
すごいね、上手だね以外の言葉がけをする	言葉がけ	具体的
具体的に注意する		
注意するとき禁止の言葉を遣わない		
何がいけないか、わかりやすい言葉での注意		
きつくならず、子どもの目線になりわかりやすく注意する		
問いかけを増やす		
問いかけの言葉がけをする	言葉がけ	考える機会
子どもたちが考えるような言葉がけをする		
次に言葉が出てくるように働きかける		
先に指示を出さず子どもの様子を見て言葉がけをする		
興味関心が膨らみそうな子どもへの言葉がけをする	言葉がけ	次につながる
次につながる言葉がけをする(2)		
子どもの興味が広がるような言葉がけをする		
遊びが広がるような声がけをする		
注意するとき禁止の言葉を遣わない	言葉がけ	禁止なし

表1-1 目指す行動(1)

保育中における子どもへの援助改善の試みが子どもと保育者に与える影響

目標行動	カテゴリー	コード
先回りせず、子どもたちが何をしたいのか様子を観る すぐに口出しせず子どもが考えて行動することができるように見守る 自分でできることについては手を出さない 全てを教えない 試行錯誤することを否定せず見守り必要なアドバイスを 衣服の着脱の時、気持ちを大切に 遊びに対し必要以上に手を加えない やりたい気持ちを受け止めて見守る 子どもの遊びを見届ける 先回りして言わない すぐに声をかけるのではなく待つ姿勢を大切に 関わる	態度・行動	待つ
やり取りを5回以上 子どもの話をゆっくり聞くようにする 相手が気持ちよく話せるような聞き手になる	態度・行動	応答
時間に余裕を持って生活する	態度・行動	余裕
子どもを待たせる時間の短縮する	態度・行動	時間
絵本、紙芝居の選び方を変える	態度・行動	絵本
笑顔で会話を楽しむ	態度・行動	笑顔
できたことやチャレンジしたこと理解して取り入れる	態度・行動	受容
自由に作れる場と時間を確保する 自然物に触れ合えるような環境設定（2） 環境素材を見直す 主体的に遊べるような環境設定	環境設定	活動
安全な環境づくり	環境設定	安全

表 1 - 2 目指す行動（2）

研究紀要 第42号

4. 目標行動達成率

目標行動の達成率は、全体では68.7%であった。各行動目標に対する達成率は、言葉がけ72.6%、環境設定69.3%、態度64.0%、の順であった。

5. 保育者の変化・子どもの変化

目標行動のカテゴリ別に保育者の変化、子どもの変化をまとめ、表2-1、表2-2、表2-3に示した。

環境設定			
目標行動	保育者の変化	子どもの変化	
	自由で作れる場と時間を確保する	環境を変えるだけで <u>子どもたちの姿が変わることを実感した</u>	空き箱を置くスペースを決めただけで自分で空き箱を集めたり <u>自由に作ることを楽しむ姿</u> がみられた
活動	環境素材を見直す	子どもたちの姿が見えていることが大切であると感じた。 <u>柔軟に対応することの難しさ</u> を感じた	子どもが少しの変化にも気づいて遊びに取り入れようとした。 <u>物を試す、使う姿がみられた。</u>
	自然に触れる環境	もっと自然に触れる機会をもてるようにしたいと感じた	子どもが製作したものを飾ったのでとても <u>喜んで</u> いた
言葉がけ			
目標行動	保育者の変化	子どもの変化	
	言葉を選んだ言葉がけをする	いったん <u>落ち着いて</u> 話せた。	
丁寧	一人一人に丁寧な声掛けを心がける	丁寧な言葉をかけることで <u>より子どもの姿</u> を見ることができたと思う。	
	褒める言葉がけをする	マイナス面は目につきやすいがよいところを見逃さずに言葉に出して褒めるのは <u>意外と難しい</u> と感じた	褒められたことで <u>自信</u> を持てたようである。他の先生に褒められたことを <u>嬉し</u> そうに話していた
	感謝を伝える	照れがあつてなかなか <u>言えなかった</u> が、2週目になると言えるようになった	アドバイスばかりせず褒められることが <u>嬉し</u> そうだった
	前向きな言葉がけをする	ここまでできなかった、ではなく、 <u>ここまでできた</u> と考えるようになった	<u>自ら動ける</u> ようになった
肯定・受動的	否定的な言葉でなく意欲が持てるような言葉がけをする	否定をせず <u>認めること、楽しむこと</u> で子どもたちが変化することが目で見てわかり保育が楽しいものになった	保育者が <u>落ち着かない</u> と子どもたちも <u>落ち着かず</u> 否定的な言葉を遣い、ぐずりや反抗が強かった
	プラス一言加えて褒める	体調や精神的な面が影響することがわかり、 <u>余裕</u> をもって保育に取り組みたいと思った。	褒められることで子どもたちの <u>表情</u> が変わった。次も褒めてほしいとアプローチするようになった
	共感する言葉がけをする	余裕がないと口調がつい強くなっていたが、意識することで <u>落ち着いて</u> 話しかけることができた	以前よりスムーズに <u>落ち着く</u> ことができた
	できたところを見つけ伸ばす	自分自身が意識して子どもたちに関わる、話しかけることで自分も楽しく過ごせた	他の子どもたちと <u>話がふくらむ</u> ようになった。あまり話しかけてこない子どもからも <u>話</u> しかけられるようになった

表2-1 保育者の変化(1)

保育中における子どもへの援助改善の試みが子どもと保育者に与える影響

		言葉がけ	
目標行動		保育者の変化	子どもの変化
	具体的に褒める	じっくりと話を聞くようになった。いつもは、ここをもっと…と思う意識を変えた	
	すごいね、上手だね以外の言葉がけをする	今までの言葉がけを振り返るようになった	すごいね、上手だね以外の言葉を遣ったらそこからまた話が広がり会話が弾んだ
具体的	具体的に褒める	その場ですぐに褒めたことでもう一人の保育者と共通認識が増え、もう一人の保育者のことも褒めることが増えた	嬉しそうにしているすがたが見られた
	問いかけを増やす	よりひとつひとつを <u>考えるようになった</u>	はじめは考えや思いを言葉にできなかったが少しずつ問いかけに言葉が返ってくるようになった
	きつくならず、子どもの目線になりわかりやすく注意する	きつくならないよう注意することができた	子どもがたくさん話しかけてくるようになった。また、目をみることが多くなった
考える	問いかけの言葉がけをする	何を問いかけるか、その時に必要な質問を <u>考えるのが難しかった</u>	不正解がないことがわかると話したり、逆に保育者に質問を投げかけたりする姿が徐々に増えている
	次に言葉が出てくるように働きかける	記録することで保育を <u>見返せた</u>	普段より言葉が増えた
	先に指示を出さず子どもの様子を見て言葉がけをする	先走ってしまうことがあったと <u>振り返れた</u> 。子ども同士で声をかけあう姿に成長を感じた。	次は〇〇だよ、と子ども同士で声を掛け合う場面が多かった。見て、と言ってくる機会が増え嬉しそうであった
広がり	興味関心が膨らみそうな子どもへの言葉がけをする	子どもたちへの向き合い方が丁寧になった。子どもの <u>気持ちを考えるようになった</u> 。子どもの <u>声を聴くようになった</u>	子どもの方から声をかけてくることが増えた。やってみたい、こういうのはどう？という言葉がたくさん聞かれた
	次につながる言葉がけをする	やり取りを楽しみながらできるようになった。 <u>考えながら話せるようになった</u> 。すごいね、ではなく、他にもいるかな？等次につながる言葉を意識できた。	<u>考えてやり取りする姿</u> が見られた
	遊びが広がるような声かけをする	子どもの姿も少しずつ見えてきた。子どもが見えてきたので子どもへの <u>言葉がけ</u> が考えられるようになった	<u>会話をしながら遊ぶ</u> ことが増えたように感じる
禁止なし	注意するとき禁止の言葉を遣わない		今までより保育者の近くに来るようになった

表 2 - 2 保育者の変化 (2)

研究紀要 第42号

		態度・行動	
目標行動		保育者の変化	子どもの変化
待つ	先回りせず、子どもたちが何をしたいのか様子を観る	見守ると子どもたちが何をしたいかわかった	
	すぐに口出しせず子どもが考えて行動することができるように見守ることを多くする	一人ひとりのことがより見えるようになった。個々のことを認めてほめる回数が増えた。	
	自分でできることについては手を出さない	子どもの行動、言葉、発想がおもしろく、より引き出していきたいと思い遊びの内容、声掛けの内容、用意する素材等より工夫するようになっている。	やりたいことがある時はうまくいかなくてもあきらめないし生き生きした表情がみえた
	試行錯誤することを否定せず見守り必要なアドバイスをする	良い点を褒め自信をもてるような声掛けに気を付けるようになった	自らアイデアを出そうとする積極性が見られた
	衣服の着脱の時、気持ちを大切にしている見守る	時間がある時はやりたい気持ちにこたえられたができないとできなかった	待つことで、自らやってという子ども、自分が納得するまで着脱をしていた
	遊びに対し必要以上に手を加えない	動き、言葉、何に夢中なのかをよく見ることができた	のびのびと遊びを楽しむ姿が見られた
	やりたい気持ちを受け止めて見守る	丁寧にかかわれるようになった。少し自信が持てるようになった	痲痺を起す子供が少なくなった。達成感で嬉しそうだった
	先回りして言わない	見守ってから言葉がけができた	自主的な行動ができていた
	すぐに声をかけるのではなく待つ姿勢を大切にしている	意識することでプレッシャーはあったが、向き合い方が変わり保育が楽になった。	気持ちに余裕があると子どもたちも安心し意欲をもつようになった。言葉がけひとつで変化がみられた。
	応答	やり取りを5回以上	常に頭にあったことで取り組もうという姿勢が保てた
子どもの話をゆっくり聞くようにする		言葉のかけ方を常に気にするようになった。考えすぎて、楽しめなかったこともある。	自分から話すようになった
相手が気持ちよく話せるような聞き手になる			自分が穏やかだと相手もおだやか
笑顔	笑顔で会話を楽しむ	言ってしまった後でももう一度考え、子どもとも話、よりよい伝え方を考え直すことができた。	
	できたことやチャレンジしたこと理解して取り入れる	話すときの大切さを学ぶことができた	会話を楽しみにする姿が増えた

表 2 - 3 保育者の変化

保育中における子どもへの援助改善の試みが子どもと保育者に与える影響

カテゴリー別の結果で主なものは以下の通りとなった。

肯定・受容的な言葉がけ

子どもたちが自信を持てた、嬉しそうであった、自ら動けるようになった、表情が変わった、落ち着いた話がふくらむようになった、話しかけられるようになった、と報告された。また、保育者は、肯定的、受容的な言葉がけをすることは、なかなか難しいと感じているが、意識することで前向きな言葉をかけられるようになったことを実感していた。

具体的な言葉がけ

褒める時などにも“上手だね、すごいね”以外の言葉をかけたことで、子どもたちとの会話がはずんだ、子どもたちの嬉しそうにしている姿が見られた、問いかげに言葉が返ってくるようになった、等子どもたちとの会話が増えたことが報告された。保育者は、より具体的な言葉を遣うことで、考えて子どもに接することができるようになったとの報告もあった。

(子どもが) 考える機会をもつ言葉がけ

考える機会を与えるように保育者が意識したことで子どもたちは、保育者に質問を投げかける、子ども同士での会話が増える、言葉が増えるなど、子どもたちの会話が活発になる傾向があった。

(次に) 広がりを持たせる言葉がけ

遊びが広がる、会話が広がるように保育者が意識したことで、子どもたちから声をかけることが増えた、子どもたち同士の会話が増えて遊ぶようになった、また子どもたちが考えてやり取りする姿が見られたと報告された。

待つ

すぐに手を出さない、先回りしないなど保育者が、待つ、見守ることを意識したことで、

子どもたちは諦めずに納得するまで活動した、積極性がみられた、のびのびとした、自分から行動できるようになった等の変化がみられたと報告された。

応答

子どもの話をゆっくり聞く、子どもとゆっくり話すようにしたことにより子どもとの距離が縮まった、子どもが自分から話すようになったと報告されている。

6. 実行できた要因

目標行動を実行できたかどうかに対して介入期間中 50%以上実行できた場合の要因について、共起ネットワーク分析の前処理段階での言葉の出現回数を分析したところ、最頻出言葉は、“意識”(17)、次に“目標”(13)であった。

記述内容を表3に示した。

“文字化すること(目標・記録)で意識が高まった。具体的な目標もよかった”というように、具体的な目標を立て、記録をつけ、意識をもって過ごすことが成功の要因であることが示された。

7. 実行できなかった要因

実行率 50%以下の者は 2 名だけであったため、ほとんど記載はなかったが、時間に余裕がなかったことが一番の要因であった。

IV. 考察

本研究は保育者を対象として、保育中の子どもに対する援助を見直し改善を試みる行動変容の理論に基づいた介入を行い、保育者と子どもに与える影響について質的データを基にして探索的に分析し、検討することが目的であった。

まず、保育者が自分の援助を振り返り、目標とした行動について考察する。目標とした行

成功理由	意識	目標	記録	小さい 具体的な目標
文字化することで意識が高まった。具体的な目標もよかった	○	○	○	○
目標をたてて意識したため。余裕がないと実行率が下がった	○	○		
目標行動を心がけたこと	○	○		
目標設定したことで意識して行うことができた	○	○		
目標を書いたことで意識が変わり自然と思い出す機会が増えた	○	○		
意識したことがよかった	○			
意識して保育したため。時間に追われてしまうとできないこともあった	○			
意識したことがよかった。余裕がないとできない時があった	○			
具体的に褒める言葉のかけ方がかなり変わった	○			
子どもの気持ちに寄り添うよう心掛けた	○			
気を付けるよう心掛けた	○			
意識しながら保育したこと	○			
意識したので（3）	○			
意識したことでいったん頭で考えるようにしたため	○			
常に考えるようになった	○			
意識することで子どもとの向き合い方が変わった	○			
意識することで変えていくことができた	○			
目標が見える位置に置き、毎日達成率に印をつけた		○	○	
紙に書き、目標を明確にしたことで行動に移せるようになった		○	○	
具体的で実現できそうな目標にしたのがよかった		○		○
関心の高い内容を課題としたこと		○		
やさしい目標の方が成功している		○		
毎日記録を付けることで振り返りができ、意識ができた。			○	
評価を書くこともやらなければという気持ちになった			○	
毎日記録することで意識できた。うまくいかなかった時に振り返れた。			○	
スモールステップの実行可能な課題を設けたこと				○

表3 実行できた要因

保育中における子どもへの援助改善の試みが子どもと保育者に与える影響

動は、大きく分けると言葉がけ、と姿勢、態度であった。そのうち、言葉がけでは特に肯定的、受容的な言葉かけを意識したものが多かった。次には具体的な言葉がけ、子どもが考える機会をもてるような言葉がけ、次に広がるような言葉がけと続いた。保育者の姿勢、行動においては、先回りして言わない、全部を教えない、見守る等であり、全般的に保育の中で見守ることを意識したいと考えている保育者が多かった。

これらは、援助する時の基本として、保育者養成にあたり学生に教授していることである。しかし、ベテランの保育者であっても、難しいことである、ということが今回の調査で明らかになった。その背景には保育者不足による多忙、多様な子どもたちの存在などが考えられる。

次に、介入における子ども、保育者への影響を考察する。介入中、目標行動の実行率は68.7%であり、50%以下だった行動は7.6%であり、実行率は高かったと考えられる。

“言葉がけ”においては、全般的に目標行動を実行したことにより、保育者自身、子ども共に肯定的に変わったと実感していた。子どもは褒められると表情が変わる、自信が持てたようである、嬉しそうであることに気づき、子どもが嬉しそうにすることにより、保育者自身も楽しく過ごせた、と感じていた者もいた。褒めると子どもが嬉しそうにしているものの褒めること自体が意外と難しいと感じた者、保育者自身に余裕がないと子どもを褒めたり共感したりする言葉を発することが難しいと感じていた者もいた。保育者において、この気づきが大事であり、例えすぐに実行できなくても今後意識を変えていくことにつながった可能性は高い。

また、“待つ”とコード化された“姿勢、態度”に関する目標行動でも実行したことにより、子どもがのびのびと遊んでいた、自主的な行動ができた、意欲をもつようになった等子どもに

おいて肯定的な変化がみられていた。

保育者自身も意識して見守る、見ることをしたことで、子どものことがよりよく見えるようになった、よりよい伝え方を考えるようになった、言葉のかけ方を常に気にするようになった等多くの気づきが見られた。

言葉がけと同様、子どもの変化のみならず、保育者自身に気づきがあったことは、介入が意味のあるもので保育改善に大きな影響があったといえる。

今回の介入は、実行率が高かったが、その要因は、まず、意識したことである。再頻出語でも“意識”と抽出されたことからわかる。保育改善は、まず意識することから始まるといえる。また、成功の要因として、小さくて具体的な目標を設定したこと、記録をとったこと、と対象者は回答していた。小さい目標は、対象者の効力感が高く、それ故に成功率が高かったのではないかと考えられる。また、実行したことにより、目の前の子どもの変化を実感していたことも成功率が高かった要因であると考えられる。

効力感とは、心理学者 Bandura (1977) の社会的認知理論の中核となる概念のひとつである自己効力感「セルフエフィカシー」に基づく。“目標とする行動をどの程度成功裡に達成出来るかの見込み感”、“ある結果を生み出すために適切な行動を遂行できるという確信の程度”と定義される。Banduraによると自己効力感とは、4つの情報源から影響を受けると提唱されている。すなわち①遂行行動の達成、②代理的体験、③言語的説得、④生理的・情動的喚起、である。①は、目標の行動に対して個人の成功・失敗体験、②は他者が行う目標行動の観察、③は目標行動に関連する言語的情報の獲得、④は目標行動からの身体的・感情的変化の気づきである(竹中, 2008)。本研究では、4つの情報源のうち、①遂行行動の達成、④生理的・情動的喚起を比較的短時間で実感できたことが成功の要

困となっているとも考えられる。今回は、効力感を測定していなかったが、今後、介入を行う際には、効力感の測定をすることが望まれる。

以上をまとめる。

1. ベテランの保育者であっても、肯定的・受容的な言葉がけ、待つ、という援助を心がけたいと感じている。

2. これらを意識することにより援助方法は改善できる可能性がある。

3. 意識し、行動変容の理論に基づく、小さくて具体的な目標設定、記録する試みは、援助方法を改善させ、保育の質の向上に寄与する可能性がある。

4. 援助の方法を少し変える試みにより保育者、子ども共に肯定的に変化する。

乳幼児に大きな影響を与える保育者が今後切磋琢磨して、よりよい保育を遂行していくために、本研究の介入による保育改善の試みは一助になったと考えられる。

ただし、今後は定量的にも研究し、さらに保育者の質向上のための方略を検討していくことが望まれる。

5. 引用文献

- 阿部直美(2006) 保育者の言葉がけにみる子どもの主体性の育みについての一考察 -「遊び」を通して子どもがのびのびと行動できる保育をめざして- The Human Science Research Bulletin 5 89-94
- 大久保英哲、岩崎裕香(2007) 幼稚園に於ける保育者の役割についての研究 -- 保育者の言葉がけが幼児の遊び行動に及ぼす影響 教育工学・実践研究 (33) 31-42
- 工藤 ゆかり(2016) 幼児の遊びの充実と保育者の援助 帯広大谷短期大学紀要 53(0) 19-25

須永 美紀(2017) 子どもの主体性を育てる保育者の援助 こども教育宝仙大学紀要 8 65-73

竹中晃二(2008) 行動変容 健康行動の開始・継続を促すしかけづくり 健康・体力づくり事業団

Bandura.A.(1977) Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change, Psychol Rev, 84 191-125

樋口耕一(2014) 社会調査のための計量テキスト分析 内容分析の継承と発展を目指して ナカニシヤ出版

三好 年江(2016) 保育者の意識変容と保育内容の改善を目指した園内研修：気づき・意欲・同僚性に注目して 新見公立大学紀要 37 107-114

文部科学省(2017) 幼稚園教育要領

6. 謝辞

本研究をすすめるにあたり、調査と介入に協力してくださった受講生の方々に記して感謝申し上げます。

保育中における子どもへの援助改善の試みが子どもと保育者に与える影響

保育改善2週間チャレンジ

番号 氏名 提出日：12月9日授業前

1. 本日の講義から、子どもに対する援助で変えたい、と思ったこと、その理由を下記に書いてください。

2. 変えたいと思った中から、1つ～3つ選び、具体的にどのように変えるか？を下記の表の目標①～③に書き、できたかできなかったかの程度（◎～×）で評価しましょう。1週目と2週目は同じ目標にします。

	具体的内容	月 日 ()	月 日 ()	月 日 ()	月 日 ()	月 日 ()	月 日 ()
目標①		◎・○・△・×	◎・○・△・×	◎・○・△・×	◎・○・△・×	◎・○・△・×	◎・○・△・×
目標②		◎・○・△・×	◎・○・△・×	◎・○・△・×	◎・○・△・×	◎・○・△・×	◎・○・△・×
目標③		◎・○・△・×	◎・○・△・×	◎・○・△・×	◎・○・△・×	◎・○・△・×	◎・○・△・×
	具体的内容	月 日 ()	月 日 ()	月 日 ()	月 日 ()	月 日 ()	月 日 ()
目標①		◎・○・△・×	◎・○・△・×	◎・○・△・×	◎・○・△・×	◎・○・△・×	◎・○・△・×
目標②		◎・○・△・×	◎・○・△・×	◎・○・△・×	◎・○・△・×	◎・○・△・×	◎・○・△・×
目標③		◎・○・△・×	◎・○・△・×	◎・○・△・×	◎・○・△・×	◎・○・△・×	◎・○・△・×

3. ◎：100%、○：80%、△：50%、×：0% で計算し2週間、どのくらい実行できたか？を算出してください

4. 成功理由(成功率50%以上の方)：

子どもの変化

自身の変化

5. 失敗理由(成功率49%以下の方)：

6. 感想等